

令和5年度第1回石川県農林水産研究評価委員会 中間・事後評価結果

日時：令和5年7月27日（木）13:30～15:30
 場所：石川県庁行政庁舎1109会議室

※石川県農林水産部試験研究評価に関する実施要綱第10条に基づき、個人情報や企業情報、知的財産権の内容等機密保持が必要なものは非公開としていますので、ご了承願います。

番号	区分	機関名	課題名	研究期間	研究概要	総合評価	評価委員コメント	委員コメントに対する研究機関の回答・考え方等
1	中間	農林総合研究センター農業試験場	いしかわ園芸オリジナル品種の育成	R3～R7	フリージア（エアリーフローラ）、ナシ、リンゴの県オリジナル品種の開発状況について	A	①リンゴが温暖化により着色不良となっているが、今後、他の品種でも大丈夫なのか。 ②花がきれい、果物が美しい以外の特徴（話題性）があると良いと思う。（フリージア各色に花言葉を付けるなど） ③生産者、消費者双方のニーズに応える品種開発を続けている。各品目ブランドの価値を引き上げる特徴、特性が備わった品種開発を期待します。 ④フリージア、ナシともに順調に開発が進んでいる。石川県産品としてブランド化に努めて欲しい。 ⑤市場のニーズに合わせて色のバリエーションの開発と品種の開発を平行していくことはとても大切なことと感じます。 ⑥金沢駅でのディスプレイやイベントでの活用を楽しみにしている。単品の色だけで美しさを強調する活用方法も参考にして下さい。 ⑦今はナシ、リンゴに注力しているが温暖化が進行して、石川県より北の全国の主要産地でも栽培のしにくさが問題になってきていたり、果実の需要が全国的に減少していく、多様化してる中、県、県内農家が育てる果実の種類や品種自体を絞ったり変えていかなくて良いのか。 ⑧リンゴの早生系統に重複する品種（系統）はないようなので、やはり、継続した方が良くないか？	①⑧温暖化による着色不良の対策として、高温条件下でも着色の優れる品種や、着色の問題が無い黄色品種について、本県での育成系統に加えて、農研機構や他県育成品種などから、本県に適応する品種を選定していく予定である。 ②③⑦リンゴでは高温条件下でも着色の優れる品種を、ナシでは温暖な気候でも栽培可能な品種を選定していく予定である。また、今後、さらなる温暖化の進行を想定して、カンキツなどの他樹種について、本県での適応性を検討していく必要があると考えている。 ④⑥エアリーフローラ、果樹ともに市場のニーズを踏まえながら育成を進め、ブランド化に努めていきたい。
2	事後	農林総合研究センター農業試験場	ドローンを活用した土地利用型作物の栽培管理技術の開発	R2～R4	水稲・麦・大豆を生産する農業法人は農地集積の進行により経営規模が拡大しており、播種や収穫といった作業について、適期に効率的に実施することが課題になっている。 このため、ドローンを活用して、効果的に作業を実施できる栽培管理技術の確立に取り組んだ。 ①ほ場毎に計画的に作業できる栽培管理技術の開発 ②夜間における農薬散布の検証	A	①農家への普及を期待します。 ②新たな栽培管理技術が開発され、今後現地での活用、普及を期待します。地域、経営規模別における(1)作業効率性(2)収量向上、所得増大に関し、どの程度まで可能であるのか目標を提示し推進いただきたい。 ③農薬散布はやはり夜間の方が効果が低いように思われる。その理由も考察すべき。 ④最近よくドローンを使って農薬散布をしている風景がみられます。ヘリコプターより安価だと思えますので普及しやすいと思います。 ⑤各国と比較して日本のドローン利用は進んでいるのか。遅れているのか。 ⑥得られた情報が各農家にスムーズに利用しやすい形で届けられるシステム作りと連携が必要。 ⑦夜間飛行に関して、飛ばしている農業関係者、操作者の安全確保だけでなく、非農業者や通行人などに対する飛行周知、安全確保にも配慮されたい。 ⑧農業者の働き方改革に貢献できればよい。 ⑨ドローン防除効果の検証は統計処理に耐え得るデータを取って客観的に評価するべきだと思う。 ⑩生育状況の見える化については、より多くの指数を用いて検討してほしい。	①②④⑥⑧農業者にとっても新しい働き方改革は今後進んでいくと考えられるので、その選択肢の一つとして活用できるよう普及に努めたい。 ③⑨事後評価時には省略したが、統計的に十分な防除効果があると判断できており、実用場面では夜間と昼間との防除効果に差はないと考えている。 ⑤イギリスやフランス、アメリカなどでは早くからドローン利用のためのルール策定が進んでおり、日本よりも普及が進んでいる。日本でも法改正が進んでおり、市場規模は増加し続けている。ドローンビジネス市場規模（2021年 日本：2401億円（約16.5億ドル）、海外：221億ドル） ⑦夜間ドローン散布を実施する場合は、周辺への事前の情報提供や通行人に対する注意喚起などを徹底し実施するように周知していきたい。 ⑩活用場面に応じて複数の植生指数の使用を検討してきており、引き続き取り組んでいきたい。
3	事後	農林総合研究センター農業試験場	粘質系さつまいも「兼六」の生産拡大技術の開発	R2～R4	昭和20年に本県で選抜したさつまいも品種「兼六」は、今後、干し芋としての加工需要が期待できることから、生産拡大につながる技術開発を行った。 ①加工に適した凹凸（条溝）の少ない系統選抜 ②苗を採取する作業を省力化するため、一斉に採苗する方法の検証 ③収穫後、早期に甘味を引き出す貯蔵法の開発	A	①ブームに寄せるのではなく、独自の魅力を創ることが大切だと思われる。 ②干しいもが石川県のお土産で有名になることを期待します。 ③生産性向上に資する技術が開発されたが、他品種との収量、甘味の比較優位性が確認できなかった。また、加工段階での設備コスト面の検証も必要であると感じた。 ④兼六は安納芋やべにはるかに比べて知名度が低い。ブランド化に向けた差別化、菓子等の用途について力を入れてほしい。五郎島金時とのすみ分けも重要。 ⑤兼六の研究は評価できます。現在、普及率が低いと思いますのでもっと量を増やすようにしてほしいです。 ⑥昨年、打木町のアグリプライド（→最終版では「金沢市の農業法人」に変更）のさつまいもの育成の状況や問題点を色々お聞きした。品種にするブランド力の違いや収穫しても加工品になるまでの流通がない問題など、まだまだ奥深く、興味のある分野でした。 ⑦いもの特性を生かした加工方法を考えたとき、干しいも加工に向けた栽培ができるようになる技術になっていて、かつタイムパフォーマンス向上を実現できていて、目標は達成できている。しかし、ここで確率した技術（石川県内の）他の主要品種の生産加工に応用しにくいのが残念。 ⑧「兼六」の魅力をもっとアピールした方がよい。	①②④⑧近年、さつまいもの需要については、青果向けが減少する一方、干し芋や菓子用等の加工用の需要は増えつつあり、中でも「兼六」と同様「安納芋」や「べにはるか」等粘質系品種の人気の高い。兼六は、『石川県』を容易に連想させる品種名であることや加工用さつまいもとして一般的な「タマユタカ」と同等の収量であり、甘味度が高く鮮やかな色を持つ。これらの特徴を活かし、土産用菓子やスイーツ等、観光客向けの加工品開発が期待できることから、今後JAや農林総合事務所と連携して生産拡大に努めてまいりたい。 ③⑤⑥本研究の成果をもとに、生産と併せて加工品の開発を検討している農業法人等に対し、JA、農林総合事務所と連携しながら、コストの検証を行ってまいりたい。 ⑦他の主要品種における本研究成果の活用については、産地の要望に応じて対応してまいりたい。
4	事後	農林総合研究センター農業試験場	トマトの品質向上・栽培管理の効率化のためのスマート農業技術の開発	R2～R4	トマト栽培では、夏の高温時に、収量・品質の低下を防ぐため、ハウスの換気や細かい水管理が必要であるが、労力がかかり、負担である。 このため、換気や水やり等を自動化できる低コストな管理システムを開発するための研究を行った。 ①換気や水やりを自動化できる自作システム（国で開発）の実証 ②ハウス内の高温・乾燥対策技術として、側窓ミスト散水技術の開発	A	①トマトの販売金額と収量は増加しているのか？上がっているのであれば早く実用化を。 ②石川県だけの技術かどうかは分かりませんが導入コストも安価なのでぜひ広めてください。 ③本県トマトの栽培効率化の技術開発に関し、初心者向けマニュアルを導入したことで生産現場への普及が期待される。今後、更なる生産拡大につなげていただきたい。 ④高温乾燥対策ができたとは思いますが、平均気温、湿度だけでない経時変化等のデータも出して欲しい。 ⑤農業に携わる人は年々不足気味になっています。これに対して低コスト環境制御システムによるハウス管理自動化は大いに期待できる。 ⑥研究内容は現場に密着した細かい対策方法や手の届く方法です。今年の天候のように、今後、悩まされる高温、乾燥が進むなか、これだけで対応できるのかが心配です。 ⑦モデル農家での成果やシステムづくりのノウハウなどを周辺農家に発信して反応がある、導入に関心を抱く者がでてくるよう工夫していただきたい。 ⑧生産者にコストと品質の優位性をもっとアピールすべきだと思う。	①②③④⑤⑧本技術によりトマトの収量増加と所得の向上が見込まれており、関係機関と連携して具体的なデータを示し県内トマト産地へ普及させたい。 ⑥⑦今後も温暖化が進展することが見込まれる中、これまでも地下水を利用した空調装置の開発などに取り組んでおり、生産者が各々のハウスの立地条件や作付体系、経営規模等に応じて最適な高温対策を実施できるよう、対策技術のメニュー拡充を図ってまいりたい。

令和5年度第1回石川県農林水産研究評価委員会 中間・事後評価結果

日時：令和5年7月27日（木）13:30～15:30
場所：石川県庁行政庁舎1109会議室

※石川県農林水産部試験研究評価に関する実施要綱第10条に基づき、個人情報や企業情報、知的財産権の内容等機密保持が必要なものは非公開としていますので、ご了承願います。

番号	区分	機関名	課題名	研究期間	研究概要	総合評価	評価委員コメント	委員コメントに対する研究機関の回答・考え方等
5	事後	農林総合研究センター農業試験場	業務用野菜生産における効率化・省力化技術の確立	R2～R4	能登では企業が農業参入し、大規模に業務用野菜の生産に取り組んでいる。こうした参入企業では、能登の赤土で業務用規格に適した栽培技術の確立や効率的な収穫作業が課題である。 ①排水対策機械の実証と能登の赤土での収量が最大となる収穫時期の検証 ②ドローンを活用した収量最大となる収穫時期の予測方法の開発	B	①3年もかける研究ではないのでは？ ②能登の赤土を活用して耕作放棄地を減少させてください。 ③企業経営視点から見た収益拡大の可能性を示しているものの、導入メリットを多角的に分析した情報が少ないと感じた。 ④カットドレーン施行やドローンの導入を評価したもので「研究」の側面に乏しい。何を独自に開発したのかは不明確である。 ⑤赤土の水はけの悪い環境のところ、農作物が育ちにくい耕作地を低コストで生産性をよくすることは評価できる。 ⑥業務用野菜、ワールドファーム（→最終版では「参入企業」に修正）、6次産業化、次世代農業と1番必要とされている部門であるが全く知識がなく、説明をまたしてほしい。 ⑦キャベツのみ、特定企業のみで成果選元になってしまう研究だと公的機関が研究する意義がみえにくくなる。県内、能登地域全域で、あるいは応用して他の作物でどのくらい成果を活用できそうか、アレンジを期待したい。 ⑧農作業の手間の軽減は良いことです。あとは普及と定着に向けてがんばってほしいです。 ⑨生育指標値と実際の生育との関係がよくわからない。データで示した方が良い。	①④ドローンで生育予測（診断）を行うには、植物の生育の実測値とドローン撮影から得られた植物の生育指標値を突合せさせ相関を明らかにすることが「研究」であり期間を要した。 ②③⑦⑧今後、導入メリットを多角的に示すとともに成果は他の野菜農家にも普及できる内容であるため可能な限り広く普及に努めたい。 ⑨説明資料にデータを示さなかったが、生育指標値と生育データは参入企業に具体的に示して理解を深めたい。
6	事後	農林総合研究センター畜産試験場	おいしい能登牛生産技術試験＝黒毛和種去勢牛のオレイン酸含有率増加に向けた飼料給与体系の確立＝	R1～R4	能登牛の枝肉重量の更なる増加に向けて、肥育中期・後期の飼料の給与体系を確立する。 ①飼料摂取量増加のための発酵TMR利用 ②肥育中期・後期における発酵バガスの利用	A	①良くも悪くも同じ品種で研究しないといけないのでは？ ②飼料の栄養成分に関し、肉質向上につながる成分バランスを数値化した情報を提供できれば、生産者が独自に飼料を選択できると感じた。今後の活用に期待したい。 ③量から質への変化は確実に進んでいる。結果はもちろんプロセスへの視点はこれから必要です。アニマルウェルフェアの観点も含めた研究に発展させるべき。 ④能登牛は脂身の量が多くたくさん食べられない、食べ過ぎると胃がむかつくなどの意見もある。 ⑤各県には各々地域のブランド牛肉が支持されていて、市場拡大は大切なことですが、どの問題より難しいと感じます。 ⑥育てるときにアニマルウェルフェアを考慮している点を販売時に消費者、実需者にわかるように示すことを工夫していただきたい。 ⑦「サシがたくさん入る牛肉」でなければならないのか？別の価値基準での育て方の改善や需要向上を考慮して、研究成果を活用、応用することで、独自性ある品づくりや動物福祉配慮商品ができるなど、アレンジはできないのか。 ⑧飼料の効果が明確に表れていたで、さらに枝肉重量の増加に向けて探求してほしいと思います。	①同じ品種で試験は行っていますが、試験の素牛は農家より購入しており、同一系統の牛の入手は困難な状況です。 現在の黒毛和種には主流となっている血統のルーツを遡ると代表的な系統が複数あります。肉質に秀でたもの、増体に秀でたもの等それぞれに特徴があり、どの系統（血統）の牛を種付けするかは農家により考え方が異なります。 ②家畜には成長過程や生産性などに必要な栄養成分を数値化した「日本飼養標準」というものがあります。本試験もこれに基づき飼料設計をし、粗飼料の食い込みが落ちないように工夫をしました。 ③⑥アニマルウェルフェアを考慮した家畜の飼養管理はほとんどの農家が既に行っています。肥育牛は粗飼料の摂取量が減り、濃厚飼料の摂取量が過多になることで病気になりやすく、これはアニマルウェルフェアの基本概念のひとつ「苦痛、障害および疾病からの自由」にかかります。本試験では粗飼料を食い込ませる工夫をし、肥育牛の病気を減らせるように取り組んでいます。 今後、このような肥育牛の飼養管理を知る機会を増やし、消費者の知識を広げることでアニマルウェルフェアを考慮した商品の需要が高まることを望みます。 ④体内に入った脂肪の融点が人の体温より低いと消化が早くなるため、食べやすくなると言われていいます。脂肪融点を下げるオレイン酸や不飽和脂肪酸含量の改善につながる研究を続けます。 ⑤能登牛のブランド戦略については、関係機関と連携し取り組んでいる最中です。 ⑦現状、畜産農家が出荷する肥育牛の枝肉はサシが入っているものの評価が良く、高価格で取引されています。しかし消費者のニーズは枝肉の評価と必ずしも同じではありません。また動物福祉に関しては取り組み状況が農場により変わるので、それらをどう評価するのか、販売時にどのように表示するのか等の基準がありません。今後そういった知識を消費者に広げたいと考えています。 ⑧今後も飼料の食い込みや枝肉成績が向上するよう研究に取り組みます。
7	事後	農林総合研究センター畜産試験場	機能性成分を強化した豚肉の開発	R2～R4	県内産豚肉の生産には、農家戸数、飼養頭数の減少に加え、能登豚には特徴が弱いという課題がある。 また、県内には通常の豚肉よりα-リノレン酸を多く含有する能登豚「αのめぐみ」という豚肉が生産されているが、全国にも機能性成分を売りにした豚肉が存在し、産地間競争は厳しくなっている。 このため、機能性成分を強化する豚肉生産を検討した。 ①豚肉へのビタミンEやセサミンなど機能性成分移行調査 ②能登豚「αのめぐみ」におけるビタミンEやセサミンなどの機能性成分強化	B	①研究も大事だが、PRの仕方だと思う。 ②「BBQならαのめぐみ」等のTPOを意識した商品化を模索した方が良いと思う。 ③(1)消費者が望む新たな価値を提供できるのか(2)他産地ブランド豚肉に対し優位性を検証した情報を確認できない等、付加価値向上をPRする転で課題があると感じた。 ④せっかくのビタミンEが調理によって失われていると思います。豚肉は生では食べないので調理後の評価は必要である。 ⑤能登豚は味も良く、脂身が少なく、食べやすく、おいしいと評判が高いと思う。今回の研究テーマはこれからの普及に良いと思う。引き続き、県民のニーズにあった研究を期待します。 ⑥機能性成分を含有する食品のイメージについて、一般の消費者は柔らかくジューシーでおいしい＝手にとる、買い求める。 ⑦工夫や良さが消費者に理解されるようにする取組みも並行して進めてください。 ⑧味、値段を上回る魅力の機能性がないと消費者は購入する意欲がないと思う。研究目的は達成しても、購入量アップの試みをアピールしなければブランド力向上は望めないと思う。	①③⑥⑦⑧消費者にとって重要な価格、味等を調査しつつ、今後も消費者の求める豚肉に応えることができるような研究に取り組むとともに、研究内容を含め消費者へのアピールも考えていきたい。 ④農研機構の「調理・加工工程におけるビタミン含量変動情報」によると豚肉（バラ）を焼いた場合はビタミンEの残存率は83%と記載されており、本研究の豚肉も残存率は高いと考えられます。また、能登豚「αのめぐみ」の機能性成分であるα-リノレン酸は熱によって酸化し効果が薄れてしまうため、しゃぶしゃぶのような加熱加工時間が短い調理法が良いと考えられており、本研究の豚肉も加熱加工時間を短縮させることでビタミンEやセサミンの残存率を保持することができる可能性があります。

令和5年度第1回石川県農林水産研究評価委員会 中間・事後評価結果

日時：令和5年7月27日（木）13:30～15:30
場所：石川県庁行政庁舎1109会議室

※石川県農林水産部試験研究評価に関する実施要綱第10条に基づき、個人情報や企業情報、知的財産権の内容等機密保持が必要なものは非公開としていますので、ご了承願います。

番号	区分	機関名	課題名	研究期間	研究概要	総合評価	評価委員コメント	委員コメントに対する研究機関の回答・考え方等
8	中間	農林総合研究センター林業試験場	能登ヒバの抗菌・抗ウイルス性等の評価及び木質空間の快適性の評価	R3～R7	近年、生活様式の見直し等により、建築物の内装で使用される木材の衛生性や快適性の評価が求められている。また、県内企業からは、能登ヒバ材などの抗菌性や抗ウイルス性等の効果や木質空間の快適性に関する研究が要請されている。R3年度、R4年度の2カ年では、能登ヒバ材の抗ウイルス性の効果について検証を行った。	A	<p>①ヒバ以外の木材と対比することが必要。</p> <p>②抗ウイルス性は興味がありますが、他の木材（スギ等）との比較で能登ヒバの優位性を出して欲しい。能登の気候には能登ヒバが最適な空間になることを研究して下さい。</p> <p>③石川の新たな魅力を伝えることができる研究であり可能性を感じた。実用化に向け石川能登産の優位性を立証し、世界へ魅力を発信できる研究成果を期待します。</p> <p>④ヒノキチオールは対象区として使用するべきである。ヒバの成分の分析は必須である。</p> <p>⑤実験の結果、ウイルスが何の働きでウイルス量が減ったのか根拠がない。化学的、その他の根拠の追及をお願いします。あやふやな根拠で公表はしない方がよい。</p> <p>⑥ヒノキチオールは使い方によっては大きな成果を出すことができるが、住宅内に使用するということは、そこで生活する子供たちなどが一日中、影響を受けるということになる。シロアリも近づかない成分であり、人体への影響がないか、アレルギー反応などを含め、研究を進めていただきたい。一時的に人が出入りする、浴槽や店舗などにおける使用は良いと思う。また、住宅の土台など適材適所に使用すべき。</p> <p>⑦県産の商品としては、能登ヒバはもっと普及、ブランド力を継続すべき商品と思っています。見た目も美しく、香りもすばらしく、抗菌効果もあります。香りと抗菌の持続の関係をもっと研究して下さい。</p> <p>⑧効果の持続性、経年変化についての追跡、古いヒバ家屋での効果などをチェックして「家」にヒバを利用することのメリットが長く得られ、そこに費用を出して新築、リフォームするのがいいなど思ってもらえるのか。家の材での利用よりも、小物や香り材としてマメに購入、交換してもらえる物でウイルスフリー商品にした方がよかつたりしないのか。（その方が、いろいろな業種、業者、場面が関わって経済効果も高いのでは）</p> <p>⑨他の木材と比較しないと能登ヒバの優位性が立証できない。コントロールとして何らかの木材を試料として入れておかないといけない。</p>	<p>①②④⑨本研究は、能登ヒバ材そのものの性能を明確にすることを目的とし、他の木材との対立ではなく、ヒバ材を利用した内装材の効果を調査・研究しているものであり、比較対象を擬木や非木製の表装製品等の内装材と見え、試験研究を実施していることをご理解願います。</p> <p>なお、ヒノキチオールは液相（ヒノキチオールは結晶（粉体）で液体に含まれていることが多い）のため、今回行った抗ウイルス性の評価の実験方法とは異なると考えられ、対象区としての実験は困難です。加えて、ヒバの成分分析やヒノキチオールの効能についてはすでに多数の方が実施し結果が出ております。</p> <p>⑤本研究の抗ウイルス性の実験及び評価は、JISの抗ウイルス性評価の試験方法に準拠しており、ウイルスの減少が確認されたことは、客観的な事実であります。</p> <p>なお、ウイルスの減少機構の解明についての試験については、大学レベルでの試験設備及び研究資金が必要となることから、当試験場単独では実施が困難なことをご理解願います。</p> <p>③⑥⑦⑧木材から発する化学物質がアレルギー反応を含め人体に影響を与えることがあることは知られています。今後の官能試験については、室内空気を経時的に分析し、人体への影響にも配慮しながら実施してまいります。また、分析結果についてはアレルギー物質などの確な情報提供に努めてまいります。</p>
9	事後	農林総合研究センター林業試験場	香り成分を多く含む樹木の生産技術等の開発	R2～R4	<p>樹木の香り成分には、リラックス効果が期待されることから注目が高まっており、こうした樹木を活用していくことは、林業の新たな収入につながる。このため、香り成分を多く含む樹木の持続的生産や活用拡大についての研究を行った。</p> <p>①クロモジ：生育調査を実施し、持続的生産や生産拡大の可能性について検討</p> <p>②カラスザンショウ：芳香成分を特定するために成分分析を実施する等、香り樹木としての活用の可能性について検討</p>	A	<p>①もっとPRをしてください。悪いものではないので。</p> <p>②大手香料メーカーと共同研究等で早期に商業ベースに乗せた方がよいと思います。</p> <p>③林業の持続可能な経営につながる研究であり、普及、実用化に向け、ブランド戦略を策定し民間企業とのコラボ事業を検討いただきたい。</p> <p>④量の評価だけでなく、質の評価も実施すべき。好感の持たれる香り、ストレスを軽減する香り、あるいは殺菌効果など、調香とあわせてブランド化すべき。</p> <p>⑤研究テーマは大きく評価する。ストレス社会においてリラックス効果のあるものを好む人が多いです。自然から出る香り、きつくない、ちょうど良い香り、長時間吸っていてもリラックスしてられる香り、化学的に作られた物では自然には勝てません。物の価値は使う人によって決められます。良いものでも使ってくれなければ何もならないので、今後の普及に期待します。</p> <p>⑥全てのテーマに言えるが、もっと市場の情報を聞いて研究を進めた方がよいと思う。</p> <p>⑦香りは日本人としては、好き嫌いが分かれるジャンルで、必要かと言われると香りとしては少なく、成分の活用としてはとても伸びている分野であり、医療、福祉、リラクゼーションで活躍していただきたいと思います。</p> <p>⑧さわやかさ、硬さ、落ち着きがあり、軽い自然の香りは案外ニーズがあるのでは。アロマなどは甘く、重たく、強い。女性ウケするものが多いので、さりげなく利用できてリフレッシュできるものがあると需要の幅が広がるのでは。</p> <p>⑨間伐で得られる資源で今までうまく活用されてこなかったものを資源化するという経済性や環境の観点からの意義を人にうまく伝えることも工夫が必要。</p> <p>⑩ブランド力向上のためにネーミングを至急、考えた方がよい。</p> <p>⑪様々な利用、活用方法を検討していただきたい。</p>	<p>【クロモジ】</p> <p>②③⑥県内の加工事業者が既にクロモジの関連商品を販売及び開発しております。販路拡大に意欲があるため、今後も原材料の安定供給に向けて、バックアップしてまいります。</p> <p>⑨⑩「クロモジ」は国内外で精油や生薬等として既に人気があります。今回の研究により、スギ人工林の間伐跡地においてクロモジの持続的生産が可能であることが分かり、原材料の安定供給と森林整備の保育作業時の副収入源として期待できるため、林業事業者や森林所有者に成果を普及してまいります。</p> <p>①④⑤⑦⑧⑩⑪加工事業者より、相談がありましたら、必要に応じて対応してまいります。また、様々な機会を通じて、今回の結果をPRしてまいります。</p> <p>【カラスザンショウ】</p> <p>⑥今回の成果を受けて、加工業者からは実用化を検討したいとの意向を聞いております。今後、原材料の安定供給に向けて、今回の成果を林業事業者や森林所有者へ普及してまいります。</p> <p>①④⑤⑦⑧⑩⑪加工事業者より、商品化やネーミング等について相談がありましたら、必要に応じて対応してまいります。また、様々な機会を通じて、今回の結果をPRしてまいります。</p>